

主観的な幸福度と客観指標としての SDGs との連関 についての基礎的考察

千葉大学大学院社会科学研究院教授
石戸 光

本稿では、主観的な幸福度と客観指標としての SDGs との連関について、基礎的な考察を行ってみたい。筆者は開発経済学を専攻しており、かつて国連開発計画（UNDP）に勤務していたが、所属する同組織は開発の度合いを計測する人間開発指数（Human Development Index）および人間開発の概念をベースとしたミレニアム開発目標（Millennium Development Goals: MDGs）を所管していたことを記憶している。MDGs は 2000 年から 2015 年までの目標期間であったため、2015 年には MDGs から持続可能な開発目標（SDGs）へと継承がなされ、地球環境問題を背景とし、持続可能性にさらに配慮した人間開発の具体的な目標設定がなされた。

SDGs には、以下の 17 の目標がある¹。

- 目標 1. 貧困をなくす（No Poverty）：「あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる」
- 目標 2. 飢餓をゼロに（Zero Hunger）：「飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する」
- 目標 3. 人々に保健と福祉を（Good Health and Well-Being）：「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する」

¹ 国連開発計画（UNDP）のサイト（<https://www.jp.undp.org/content/tokyo/ja/home/sustainable-development-goals.html>）より。

- 目標 4. 質の高い教育をみなに (Quality Education) : 「すべての人々への包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」
- 目標 5. ジェンダー平等を実現しよう (Gender Equality) : 「ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行う」
- 目標 6. 安全な水とトイレを世界中に (Clean Water and Sanitation) : 「すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する」
- 目標 7. エネルギーをみなに、そしてクリーンに (Affordable and Clean Energy) : 「すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する」
- 目標 8. 働きがいも経済成長も (Decent Work and Economic Growth) : 「包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用 (ディーセント・ワーク) を促進する」
- 目標 9. 産業と技術革新の基盤をつくろう (Industry, Innovation and Infrastructure) : 「強靱 (レジリエント) なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る」
- 目標 10. 人や国の不平等をなくそう (Reduced Inequalities) : 「各国内及び各国間の不平等を是正する」
- 目標 11. 住み続けられるまちづくりを (Sustainable Cities and Communities) : 「包摂的で安全かつ強靱 (レジリエント) で持続可能な都市及び人間居住を実現する」
- 目標 12. つくる責任つかう責任 (Responsible Consumption and Production) : 「持続可能な生産消費形態を確保する」
- 目標 13. 気候変動に具体的な対策を (Climate Action) : 「気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる」
- 目標 14. 海の豊かさを守ろう (Life Below Water) : 「持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する」
- 目標 15. 陸の豊かさも守ろう (Life on Land) : 「陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならび

に土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する」

目標 16. 平和と公正をすべての人に (Peace, Justice and Strong Institutions) : 「持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する」

目標 17. パートナリシップで目標を達成しよう (Partnership) : 「持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する」

これらの目標はさらに合計 169 の個別目標 (ターゲット) から構成されるが、それら複数の個別目標の中心にあるのは、人間を中心とした開発 (人間開発) の発想である。すなわち、経済開発 (economic development) が経済システム (すなわち人間の外に位置するシステム) の機能を高めようとすることに主眼を置いたとみられるのに対して、人間開発とは、人間の内面がより充足されるための目標である。もちろん、人間の内面そのものを直接観察することができないため、上記の目標も客観的に把握できる、いわば人間にとって「外側」にある事物についての目標であり、また主権国家による政策が透明性、説明責任を果たすことが必要のために、定量化 (数値化、指数化) が要請されることになる。

人間の内面とは、多分に人間の心理的な要素、すなわち、主観的な側面を含んでいるため、幸福度は主観的であることが多いと推察される。しかし人間開発もまた内面的、主観的なものでありながら、その具体的な目標には外的な指標が設定されるため、この人間開発そしてその具体的な目標設定である SDGs を題材にして人間の幸福度を考えることができるのではないか、というのが筆者の基本的な研究上の発想となっている。

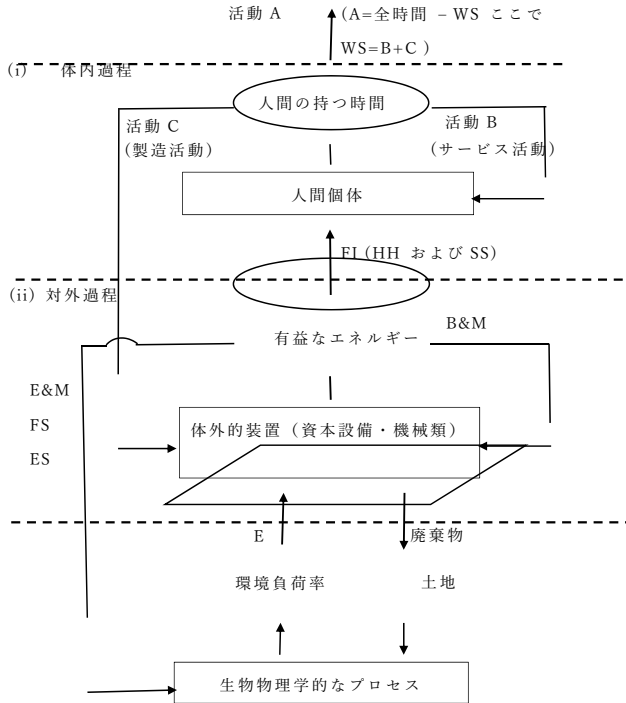
また人間開発の概念と関連するケイパビリティ (capability、潜在能力) という概念があり、これは経済学者・哲学者のアマルティア・センが提唱したものである (Sen,)。人間が潜在的になすことのできる活動の可能性を表すもので、人間中心の開発の度合いを示す。またこの概念は、人間が外部環境とのやりと

りの結果として内面的な充足すなわち幸福感を得ているに違いないことから（外部とのやり取りがなければ人間存在が成り立たないため）、人間の内面の幸福度とも大きく関連していることになる。

それは寿命、教育水準、そして経済的所得の3つの「外面的」要素が確保されなければ達成されない、とセンは提起し、これら3つの側面を具体的に把握しようと指標化を行ったものが人間開発指数であり、さらに地球環境の持続可能性を考慮した形で目標設定を行ったものがSDGsとなっている。

上述の通り、人間存在は、内面的存在と外面的（物的）存在が統合されたものと捉えることができる。人間存在を即物的に物質とエネルギーの中でとらえたものが図1である。この図は、いわゆる「生態経済学」（人間の経済と自然の生態系の相互依存および共進化を解明しようとする研究分野）の視点に立脚したものであり、国連のSDGsとの直接的な連関がない形で発達してきた視点であるが、同じく環境要因と人間の開発を考えるSDGsと接合して考えることが可能である。同図において、人間の存在および活動は、(i) 体内過程と(ii) 体外過程（図の中央部）で特徴づけられ、その下のレベルで土地（資源エネルギーを含む）を含めた生物物理学的な過程が人間存在を支えていることを示す。すなわち人間は物質的な存在であり、土地から必要な食糧その他の物質を確保することで人体を維持しているため、人体内部で起きていること（体内的プロセス）を見ることは重要であり、また一方で人間は体外的な環境に働きかけることで新たな資源獲得（図のE&M）、食糧生産（FS）、環境保全活動（ES）、サービス活動（活動B）、製造活動（活動A）という「労働行為」を通じてさらに快適に生存できるように活動している。ここで人間生存の「目的」は単なる人間個体の維持ではなく、図の活動Aで示される「クリエイティブ・心理的・文化的な活動」がケイパビリティの概念からみる人間開発の度合いを高めるためには不可欠であり、幸福度を高めることも大きく関係していることが想像される。活動Aのうち一部は次の活動B（サービス活動）および活動C（製造活動）のための新たなアイデアとして活用されるが、活動Aはかなりの程度、自己目的的な点が重要である。人間開発の度合い、そして幸福の度合いを高め

図1. 対外環境（物質・エネルギーの流れ）と人間存在の連関



注：図中の略号の意味は以下の通り。

活動 A (クリエイティブ・心理的・文化的な活動 (このうち一部が次の活動 B および C のための新たなアイデアとして活用される))

活動 B (サービス活動)：社会で用いられる物質およびエネルギーを活用して生存しやすくする活動のうち、対外的なシステム (資本設備・機械類) の生産を直接行わず、人間個体に直接働きかけるもの

活動 C (製造活動)：社会で用いられる物質およびエネルギーを活用して生存しやすくする活動のうち、対外的なシステム (資本設備・機械類) の生産を通じて働きかけるもの

FI：固定投資 (Fixed Investment) SS：サービス部門 (Service Sector)

HH：家計 (Household) B&M：建設および維持 (Building and Maintenance)

E&M：エネルギー・鉱業 (Energy and Mining) FS：食料の安定確保 (Food Security)

ES：環境の安定的提供 (Environmental Security)

WS：労働力供給のための時間 (Time for Work Supply)

ET：エネルギー生産性 (Energy throughput)

出所：Mayumi (2001), Figure 9.4. より和訳・改変。

るためには、自律的、自己目的的な活動Aが中心でなければならない、活動Bと活動Cに人間の時間が取られすぎると、ケイパビリティ（すなわちなしうの活動）の一部としての、自由な活動Aは低下する。すなわち人間開発の度合いは低下することになり、これは同時に人間の内面における幸福度を下げていることにもなっているであろう。

ここで幸福度とSDGsとの関係についての印象的な論稿（Mehlmann, 2016）の内容を、紹介したい。この紀行文はSDGsの17の目標について、グローバル・アクション・プラン・インターナショナル（GAP）という、25年間にわたってグローバルな持続可能性運動をリードしてきたNGOであり、人々の生活、ビジネス、学校、教育方法を変える力を与えてきた団体のディレクターであるマリリン・メルマン氏によるもので、SDGsと、（単なる経済成長ではなく）人間の幸福の向上を国家開発計画の中心に据えようとする世界的な運動の高まりとの関係について考察している。なおこの点では、ブータン国は古くからこの国の模範とされており、下記は同国の国王誕生日を記念した寄稿したものとされており、同寄稿文のタイトルは「覚醒的なライフスタイルと国連SDGs：国民総幸福度の概念との関連で（conscious life and the UN SDGs: in relation to the concept of Gross National Happiness）」となっている。

少し長くなるが、その要旨を以下（イタリック部分、ですます体）で抜粋的に示す²。

SDGs の場合、特にリスクがあるのは、目標 No. 8 の「すべての人のために、包括的で持続可能な経済成長、雇用、ディーセント・ワークを促進する」です。有給雇用はポジティブなものであるだけでなく、「人権」とであるとする西洋の興味深い考え方です。それは、環境と社会の持続可能性は経済的持続可能性に次ぐものであり、それらに投資するためには「十分な」お金が手に入るか、あるいは脇に置かれるまで待たなければならないという誤った考えです。環境と社会の発展への関心の欠如は、「包括的で持続可能な」経済学の基礎を急速に蝕ん

² 五十嵐慧氏（千葉大学技術補佐員）による和訳を元にしたもの。

でいます。私たちはこの点に注意を払おうではありませんか。もしSDG8の目標が他の目標を無視して執拗に追求されるならば、資源利用、気候変動、汚染のレベルは、社会が安定するずっと前に、私たちの社会を一掃してしまうでしょう。(中略)

一方で、17の目標は、どの目標に向かって行動しても、他の目標の劣化を引き起こすことが許されません。つまり、国民総幸福の概念に例示されているように、副最適化を拒否して全体的な視点を支持するような、体系的な全体とみなすことができ、そうなることが期待されます。その場合、私たちはついにポジティブで迅速な世界的変化のための強力な手段に到達するのかもしれませんが。(中略)

幸福の最も深い源は自分自身の中にあるとすれば、それにもかかわらず外的要因が役割を果たしています。それは例えば、あなたが食べ物、水、または医療の不足のために死んでいるあなたの子供を見れば、幸福を見つけることははるかに困難です。あなたは他の人があなたが欠けているそれらの同じ利点を享受していることを見ればなおさらです。強い不公平感は、強い意志と謙虚さの実践さえも弱めてしまいます。

SDGsの可能性は、人々、特に富裕層をはじめとする人々が、すべてのものがどのようにつながっているのか、私たちの日常の行動や選択が世界全体にどのように響いているのか、そして実際に、放蕩生活の増加によって、世界の富裕層が、自分たちや他のすべての生物が依存している資源の崩壊に貢献しているのかをよりよく理解できるようにすることにあります。

このような観測は、少なくとも100年前から警告を発していたにもかかわらず、これまでのところ、十分な行動を起こすことができませんでした。世界中の人々が、内なるものと外なるもの、人類と他のすべての生物との間のつながりを理解し始めているのは、ほんの少しずつです。おそらく、普遍的な適用が可能なSDGsは、このプロセスを加速させ、メッセージを理解しやすく、消化しやすく、行動の基礎として利用しやすくするでしょう。(中略) 私たちは、SDGsが、私たちや世界中で協力している多くの人々に新たなツールを提供で

きると信じています。

上記の抜粋にある通り、人間の内面的な幸福度（主観的であることが多い）と外部的（客観的に把握できる点が多い）な開発の度合いには密接な連関があり、その結節点を探ることが地球的な人間開発の度合いおよび幸福度の向上をもたらすために不可欠であることは明白である。本稿においては主観的な幸福度と客観指標としての SDGs との連関についての若干の考察を行ったものであり、主観的な幸福度と客観的な指標との接合による詳細な実証分析には至っていない。しかしこのような視点を元にさらに概念間の連関を精緻化し、その上でデータを元に人間開発の度合いおよび幸福度を計測していくことが、筆者の専攻する開発経済学の営みとポジティブ心理学からの考察の双方に通底する有益な研究作業になっていくことを期待したい。

(参考文献)

- Mayumi, Kozo (2001), *The Origins of Ecological Economics: The Bioeconomics of Georgescu-Roegen*, London: Routledge.
- Mehlmann, Marilyn (2016), "Happiness and the SDGs", (<http://17goals.org/happiness-and-the-sdgs/>).
- Sen, Amartya (2004), "Capability and well-being", in Nussbaum, Martha; Sen, Amartya (eds.), *The quality of life*, New York: Routledge, pp. 30-53.

(いしど ひかり)